
† Take it easy †

孤独なAlice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

†Take it easy†

【Nコード】

N0325V

【作者名】

孤独なAlice

【あらすじ】

＜鎌夜＞「俺 そうじょう 双条 れんや 鎌夜と女神 アイリーン様が一緒に異世界の旅に出る話だそうです。」

＜アイリーン＞「鎌夜は、いろいろあって、最強で無駄に多いチートの持ち主です♪チートもしくは、鎌夜が見たくない人は、注意してください♪」

＜鎌夜＞「ひどっー!!」

無駄に多すぎるチート!?(前書き)

はじめまして 孤独なAliceです。

名前は 気にしないでください。孤独ではありませんので…たぶん
…グスン(ノ△T)。

*作者は 涙もろいので 気にしないでください…。

無駄に多すぎるチート!?

「ああー、つまんなあいー、暇で死にそうだわー。ま、死ねないけどねー♪」

なにもない真っ白の部屋? にひとりの女神が喋っていた。

「なんか起きないかなあー♪あれっ?、なんでこの子死んでるの…。まあ、暇だしー、この子も連れて旅に出よっ♪きつと楽しい旅になること間違いなしー♪」

そう言っていると、その女神は姿を消した。

「…きて、…おきて、おーきーなーさーい!」

「んー、まだ眠い。うーん…ん?…ここどこ?」

「やっと起きた。ここは、神が住まう場所よ」

まだ夢の世界だったか。また、寝よ。夢の中まで、起こされたくない。

「ちょっと、夢じゃないわよ。

また寝ないで、起こすの大変なんだから。」

「あんた誰? 夢の住人さん?」

「わたしは、女神 アイリーンよ。あなたのことは、ずっと見てきたわ。」

ヤバイ、俺ストーカーされてたのか…

「誰がストーカーよ。わたしは、人の人生を見るのが仕事なの。だから、あなたの人生も見てたの。」

俺、喋ってないよね…。心の声聞くなよ…。

「聞こえてくるんだもん。聞かれたくないなら、喋りなさい。」

「わかったよ。で、なんで俺はその神の住まう場所にいるのか、教えてくれ。」

「簡単に言くと、あなたが死んだからよ。」

「……。いやいや、簡単すぎて、意味分からん。」

「だからね、あなたの人生はまだあと74歳は生きたの。だけど、勝手に死んだのよ。こんなことは、はじめてだったから、あなたをどうしようか迷って、天国とか地獄とかにやるのも可哀想だから、わたしと旅に出てもらうために、わたしが連れてきたの。」

「てことは、俺92歳に死ぬ運命だったんだ…。結構長生きだったはずなんだ…。てか、流しそうだったけど、旅？どこに？」

「あなた達で言うと、異世界よ。」

「じゃあ、魔法とかあるのか？」

「ええ、あるわよ。」

「俺にも、魔法を教えてくれ。頼む…。」

「そこは、安心して。あなたの残りの寿命で、魔法とかいろいろ使えるようにしたから。」

「ありがとうございます 女神アイリーン様。でも、俺の寿命ないなら、俺旅に出てすぐ死ぬんじゃない？」

「あなたの寿命の分だけ、いろいろあなたに細工したから、そこは大丈夫よ。てか、あなた不死身よ。向こうの世界では、あなたに勝てる者はいないと思う。」

「そうなのか。俺最強かよ。てか、あと俺にどんな細工したんだアイリーン様？」

「んゝとね。まあ、まず、身体強化とか変化魔法とか火・水・土・風・雷・闇・光・幻・空間・創造・治癒とかの魔法とか魔力は底無しとか武器は、双剣・大剣・刀・銃・砲・弓・鎧とかほかにもいろいろ使えるようにしたからゝ♪あとは、自分で探してね♪」

「どんだけチートだよ。自分で言うのも変だけど、もうこれ人なのか…。」

「大丈夫。まだ人よ。まあ、話が長くなったけど、早速異世界にLet's go!!」

そして、俺たちの異世界の旅が始まった…。

無駄に多すぎるチート!?(後書き)

前書きは 置いておいて…

読んでくださった方 ありがとうございます。

旅の前のお話！? (前書き)

＋プロフィール＋

名前 双条 鎌夜

性別 男

容姿 上の上

性格 怒らせると恐いが、いつもは優しい。という噂が…

趣味 読書

好きなもの 動物

嫌いなもの 敬語（しゃべるときは混じって入っている）

このお話の主人公。最強で無駄に多すぎるチート?の持ち主。執事がなんでも出来そうで格好いいからと女神さまをアイリーン様と呼ぶ。だが、かなり敬語は苦手。

旅の前のお話!?

「んんゝ。おお、ここが異世界か。なんか、意外と簡単に来れたな…。」

俺は寝転んでいたので、立ち上がった。

まあ、まずこここの場所が知りたい…。

俺がいる場所は…森の中。何処だよここ。まあ、異世界に来たということは、分かる。

なぜかって？簡単だ。俺がいた日本には勿論、外国にだって見たことないだろう植物が目の前で動いている？からだ…。

「歩く植物なんて見たことないぞ…。」

俺は何も見えていないように目を逸らし、気にせず隣を見た。

隣にはまだ倒れているアイリーン様がいた。

この間に、異世界にどうやって来たのかななどを説明しよう。

簡単な話、空間魔法を使って「剣と魔法の世界へ」って言ったら、周りが光り出して、気づいたら、倒れてました。しかも、森の中に…。まあ、異世界の行き方はこんな感じだ。

続いて、何故俺が女神さまをアイリーン様と呼ぶかというと、俺がやってみたかったんだ執事みたいなものを…いや、だって格好いいじゃん。なんか、なんでも出来る感じが…。

まあ、今のところ話すことは、こんなとこかなあ…。そろそろ隣のアイリーン様を起こさなければ…。

旅の前のお話!?(後書き)

こんばんわ)

孤独なAliceです。

お気に入り1人入れてくれた人がいるようです♪
ありがとうございます／(≡▽≡)／

これを見たとき、涙がでてきました。(十◇十)

こんな作者ですが、どうぞよろしくお願いします♪

心の声に気おつけて!?(前書き)

まだ旅に出発してくれない…。

駄文だと、気づいてる作者の孤独なA l i c eです。

気づいたら、お気に入りが、2人になっていてかなり喜んでいます。

心の声に気おつけて!?

「起きてください。アイリーン様」

「うゝん。分かってるわよ。」

返事はあったのに起きない…こうなったら…

俺はアイリーン様の耳元で小さく言った。

「アイリーン様。口からよだれが出てますよ。」

「スウー・スウー。はっ!?! う、うそ」

「はい。うそだよ☆やつと起きたあゝ起きたんなら早くここがどこか教えてくれ…」

ヒュン!!

んっ??…ヒュン?

「…鎌夜。死ね…」

そこには、美しいアイリーン様が…鎌を持ってました。

「ま、待って。お、落ち着け。いや、落ち着いて下さい。話せばわかる。アイリーン様。まず、その鎌をおろしましょう。」

「大丈夫よ。ちゃんと、アナタの上から降りお・ろ・すから☆」

「い、いや。そのおろすではなく。まず鎌を地面に置きましよう。ね。俺が悪かったから。今度から、絶対ウソつかないから。」

「当たり前よ。私だって、一応女神なんだから。わたし達、神様はウソが嫌いなもの。それに女の子にあんな事言ったら、こんな事になるのは常識よ。次やったら首飛ばすからね。」

「はい。もう絶対に言いません。」

「ところで話変わるんだけど、質問…いいですか？さっきなんで、一応女神なんて言ったんだ？ついでに、ここどこ？」

「ああー、言ってなかったかな？女神にもいろんな女神様がいるんだけど、私は生死を司る女神つかさどなの。で、あなた達から言えば、死神と呼ばれる存在。」

「えっ！！、アイリーン様。死神だったんですか！だから、鎌持ってたんですね…。」

アイリーンで名前から可愛いのに死神か…。絶対に、怒らせないようにしないと…俺チートでも死ぬかも…。

てか、心読まれてるんじゃない…。by 作者
そんな声が聞こえた気がして前を見ると、とても可愛いく美しい笑顔で、こちらを見ている死神が…………。

「死ね…。」

グサッ！！

その時刻に森の中から、絶叫が響いたのは言うまでもない…

「自業自得よ」

と、やった本人は言っていたとか言っていなかったとか…

心の声に気おつけて!?(後書き)

次回は、ありそうなパターンで、戦います。

国は何をしているんだ!?(前書き)

＋プロフィール＋

名前 アイリーン（リン）

性別 女

容姿 上の上

性格 自由気まま

趣味 鎌夜をいじること

好きなもの 鎌夜

嫌いなもの 鎌夜の敵鎌夜と隣に歩くと、カップルに見えたと、噂で聞いて、嬉しがっている。あまり顔や声に出せないが、鎌夜を好き。ライバルたち？がいるが、気にしないらしい。

国は何をしているんだ!?

あれから、一時間くらい経って…俺がやっと再生?して、元に戻った後、やっとこの森についての話があった。

「なるほど。この森は、魔の森で人も寄りつかないほど危険な森なんだな」

「そういうこと。まあ、わたしとあなたなら、全然大丈夫だけどね。」

「俺の名前は、あなたじゃなくて、鎌夜だ。そう呼べ。俺はアイリン様と呼ぶ!」

「名前で呼ぶのはいいけど…、なんでわたしを様づけなのよ!やめなさい、恥ずかしいでしょ!!。わたしのことは、リンと呼びなさい。ちゃんと、様づけなしにして、呼び捨てで。」

「ええー、…わかったよ…。」

「分かったんならよろしい。で、これからどうする?町にでも行く?それとも試しで狩りでもする?」

「うーん。どうしようかな。」

「きゃあああああ!」

「!?!」

「魔物にでも襲われてるみたいね〜どうする？助ける？」

「…試しで狩りしようか。ついでで助けるってことで、魔物狩りに
Let's Go!!」

「OK♪」

「「テレポート」」

ふう〜魔法緊張したあ〜。意外と慣れれば魔法も楽だなく〜思いな
がら前を見ると、今にも殺されるんじゃないかと怯えている女の子
がいた。

「…時よ、我が名は鎌夜。我が名において、我が声を聴き、その答
えに応えよ…。時よ止まれ…」

すると、目の前のすべてのものが動きを止めた。風も木も草も、そ
して魔物と女の子も…

「凄いわねえ〜♪さすがだわ。じゃあ、さっさと女の子を助けてあ
なたの戦いを見学しとくわよ」

「ああ。じゃあ、戻すぞ。時よ回れ…」

すると、また時間は動きだす。

魔物が自分の獲物が目の前からいなくなったのに気づき、周りを見
渡す。そして、鎌夜に気がつき、声をあげた。

「グオオオオオオオ」

「うるせえなあ。朱を纏いし双剣 紅^{くれない}」

すると、紅い二つの剣が鎌夜の手に現れた。

「さっさと、片付ける。」

魔物が見えないような速さで、鎌夜は斬っていく。まるで、舞を舞っているように…

「綺麗…」

アイリーンは思った。こんなに美しく戦うことが出来るなんて…。初めて見た鎌夜の戦いに心を奪われていた。

「グッギヤアアア」

「死ね…」

最後の一撃で、魔物は動かなくなった。

「おい。終わったぞ」

「…。無駄に格好良かったわね」

「無駄とか言うなよ…傷つくんだぞ一応…」

「はいはい。ごめんごめん。（本当は、綺麗で格好良かったけどね…）で、この子がさっき襲われていた子なんだけど…」

「あ、あのさっきは助けていただき、ありがとうございました…あ

の、私が怖くないんですか？」

その少女には、頭に犬？のような、耳がついていた…。

…コスプレ？

「…鎌夜違うわ。エルフ族よ…。人からは、恐れられているわ。魔力や頭脳が人より高いから…」

「へえ、こんなに可愛いのに…まあ、怖くないな。てか、俺の方が魔力高いから…」

「まあ、そうね。あなたは底なしだしねえ♪」

「あ、あのっ、あ、ありがとうごさいますっつ、ぐすっ…わ、わたし、人から恐れられて…、なんにも…じてないのに…バケモノ扱いざれで、石投げられたり、なぐられたりじで…」

泣き出してしまった少女をリンは背中を撫でてあげ、俺は、ハンカチを出し、涙を拭いてあげてた。

俺たちは、この世界にきて、はじめて怒りを感じた…。エルフだから魔力や頭脳が高いだけという理由で、バケモノ扱いをする奴らに…。

こんな少女にまで…

国はなにをやっているんだ！？と、何故種族差別をしているんだ！…と、言ってるやうになった…。

こんなのは、間違っている！！国がもし腐っていたら、俺が滅ぼしてやる！！
それぐらい、俺はキレていた。

国は何をしているんだ!?(後書き)

次回は 少女の名前と国に目指して出発!

死神を起こらせると恐すぎる…!?! (前書き)

今回は短めです。

死神を起こらせると恐すぎる…!?

助けた少女は、今は眠っている。泣き疲れてしまったようだ。

この少女の名前はセランと言った。年はまだ10歳だと…

セランが眠った後、リンが俺の近くに寄ってきた。

「私はこんな子にまで、辛い想いをさせるなんて…許せないわ…鎌夜、あなたもそうでしょう!! わたしは、この世界の女神じゃないけど、本気でキレそうだわ…」

「ああ、俺もだ。この子、親も居ないと言ってたから、俺らの旅に連れて行かないか? 守ってやらないと…。」

「……なあ、国の王に会ってみないか?」

「そうね。もし、ゴミみたいな、王だったら、地獄に落としてヤル…。」

…。死神のリンを本気で怒らせると、やべえな…まあ、俺もかなりキレているけど…。

これ、国無くなるんじゃないかねえの…

「じゃあ、セランが起きたら旅に連れて行くことと、事情を簡単に説明して、国に目指して出発するか…」

「ええ、ゴミだったら、国ゴト二人で潰しまショウ…」

「ああ…」

言っ
たわ
いい
が…
リン
が恐
い…

死神を起こらせると恐すぎる…!?!? (後書き)

＋プロフィール＋

名前 セラン

性別 女

種族 エルフ

容姿 上の上

性格 おとなしい

好きなもの 料理・鎌夜（助けてくれて、格好いいから♪）・アイ

リン（姉的存在）

嫌いなもの 人（鎌夜とアイリンなど以外）

家庭的なセランは、料理が大の得意。鎌夜が、日本の味付けなどを教えて、味が格段に上がった。

鎌夜は、「冒険を止めたら、みんなで店を開くのもいいな」と話すほど…。

あれ、容姿が上の上しかない…。

そして、みんな？鎌夜が好きになってる…。

魔物狩り！？（前書き）

今回は 少しでも多く書きました。

魔物狩り!?

今後のことについて話した後、疲れがでたのか俺らは、絶対防御の魔法を周りに掛け、眠りについた。

〳異世界に来て二日目〵

起きると、朝になっていた。リンはまだ寝ているが、セランの姿がないことに気づいた。

：気配を探ってみると、木の実などを取りに行っていることに気づき、俺はこの間に、近くの川に行き、顔を洗った。

後ろから、

「おはようございます。鎌夜さん、朝食ができました。」
と声が聞こえた。

「おはようセランちゃん。敬語せんでいいよ。さん付けもなし、あと朝食ありがと♪」

「えっ、あの、いえ：助けて貰ったから：当たり前のことです。ありがとうござ：：：ありがと／／あの、私も呼び捨てでいいです。
／／」

「ああ、わかったよセラン」

さて、まずリンを起こさないと：

「うーん、おはよう鎌夜・セラン」

「おはよ、リン。まず、顔洗え。朝食はセランが作ってくれたぞ」

「セランありがと。じゃあ、洗ったらすぐに行く。先に行つてて」

「了解（▽、ゞ」

「じゃあ、いきましよう」

俺らは、寝た場所に戻って、リンが来る間に、昨日のことをセランに話した。

「セランはこれからどうする？昨日は、セランも連れて、俺たちと旅に行くのがいんじゃないかなと、リンと話していたんだが…」

「…わたしは…エルフで…、人が居る場所について行ったら、鎌夜たちに迷惑が…」

「迷惑じゃないから、セランは料理得意みたいだから、嬉しいし♪可愛いからね♪それに、もし、セランに何かあったら、リンと俺で、そいつの人生変えてやるから大丈夫♪」

あれ、俺サラッと殺す宣言した気がする…

「あ、あの、ほんとに、ついて来ていいんですか？」

もう、涙目になっているセランに俺はハンカチを渡した。

「大丈夫。俺とリンに本気で勝てる奴なんて、この世界には居ない

から」

「あ、ありがと鎌夜」

セランは、鎌夜に抱きつき胸の中でリンが来るまで、泣いていた…。

リンが帰って来て、事情を話し、セランに王様が住んでいる場所と俺らが異世界こら来たことを話し、王様がいる国に出発した…。

旅の途中魔物がたくさんいて、皮や角などをギルドで売ると金になると知り、魔物狩りを…

そのときに、セランも簡単に魔物を狩っていたので、やっぱり、子供でもエルフは強いんだなあ と鎌夜は実感した。

「これだけ狩れば、かなりのお金になるよね」

「そうね。ギルドに行ったことないけど」

「じゃあ、国に着いてから、ギルドで登録をしてから、売りましよう。ギルドで登録しておけば、何かと役立ちますし。」

「そうなんだ〜♪あ、あれかな？見えてきたやつが国？」

「はい、ローデン・シオン国です。」

「名前めんどくさ。どっちなにしろよ…」

「じゃあ、そのローなんとか国に出発♪」

貴族の門番にはご注意を!?(前書き)

今回は、かなり長めに書いて見ました。

これを書いているとき、セランが可哀想すぎて、涙が…(ρ|;)

書いてる作者が言うなよ…て言われたらそれまでなんですけど…

お気に入り登録

6件!?(○○○)

あ、ありがとうございます(≧≡ε≦≡)

貴族の門番にはご注意を!?

「ふう〜、やっと、着いたあ〜」

俺たちは今、ローデン・シオン国の門の前に来ている。

セランは、エルフだとばれないように、フードを羽織っている。

…そんなのしなくていいのに…ついでにリンがこの頃、恐い気がする…

「まあ、行こう…」

「そうね。ここがどんな場所か…楽しみね鎌夜…フフフ♪」

「…検査に引っかからないように気をつけます。」

門には、やはり門番が立っていて、不審者がいないかと一人一人検査を行っていた。

「次の者。名前と年、あと血を少し調べさせてもらう。」

「少し血を出せばいいのか？」

「ああ、こういうのは初めてか？珍しいな、若いのに…」

「ああ、田舎から出てきたからな」

「そうか、いい旅を!!」

「醜いエルフだな!!このバケモノが…!!わたしに近づくな!!」

鎌夜がそちらを向くと、セランのフードが破れて？いた。

「ひっ」

セランは、バケモノと呼ばれたからか、体が震えていた：

「あなた、よっぽど死にたいのね…」

リンは、すでに鎌を準備していた：

俺は、その男の一言で何かがプチッと切れた：

「おい、うちのセランをバケモノ呼ばわりした奴、喧嘩売ってるのか？この国は、旅人や客人にバケモノ呼ばわりするのか。セランが何かしたのか？ああ？調子乗ってんのか？喋れよ！！二度言わせるなよ！」

俺はその門番に、殺気を向けた。

「ひい、お、俺は、貴族の出だぞ。ただで済むと、お、思ってるのか！」

「だからなんだ？お前の口は、付いてるだけか？飾り物か？俺は貴族だからとか、そんなんで容赦しねえぞ。お前みたいなやつ、この世界から消すことなんて、簡単なんだぞ？」

「れ、鎌夜。もういいよ…わたしなんかの為に…」

「鎌夜、落ち着きなさい。その人あなたの殺気で、泡ふいてるわよ…」

「あと、私なんかなんて言わなくていいの…セランは悪くなんだから…悪いのはコイツよ」

「ちっ、…俺も少しやりすぎた…すまん手加減したんだが…」

俺らが話していると、横からさっき、俺の検査をしていた門番がいた。

「あの、本当に申し訳ございませんでした。さっきの者は、入ったばかりの新米で、貴族だったので、わたしたちも何も言えず…種族は関係ないと言ってあったのですが…申し訳ございません」

「…いや、俺もすまん…。仲間を悪く言われて頭に血が昇っちゃまって…」

「いえ…、あの者には、国王陛下に罰を与えてもらうように言っておきます。すみませんでした。お嬢さん」

セランは、俺の後ろで俺の服の裾を掴み、門番の人をチラッと見ながら

「いえ、ありがとうございます」

と返事をした。

「じゃあ、わたしたち通っていいのね？」

「はい、後ほど伺わせていただいてもよろしいですか？」

「ああ、わかった。あんた名前は？」

「トラス・コールシュと言います。どうぞ、トラスと呼んでください。」

「俺は、レンヤ・ソウジョウだ。よろしくな」

「わたしは、アイリーンよ。リンて呼んでね♪」

「わたしは…、エルフのセランと言います…。」

「あなた達は、何者なんです？あんな殺気初めてです。それも加減したと言っていたので驚きました。それにリンさんは、見たことのない武器を持っていますし。魔力が高くて頭脳派のエルフのセランさんがいて…。」

「あゝ、あの武器は鎌と言うんだ。リンの家に伝わる武器で、リンと俺にしか使えないようにしてある。もし、誰かがさわったり使っても、すぐに、壊れてしまうんだ。でも、俺らが触ると元に戻る仕掛けになっている」

嘘では無いぞ。ここにつく前に、全部の武器をそうするように設定したから…

「へえ、そんな武器があるんですか！？では、かなり強い人たち何ですね〜ギルドランクが知りたいですよ…」

「いや、俺らはギルドにまだ入って無いぞ。それに、そこまで、強くはない。」

「え！？そうなんですか！？でも…いえ、これ以上は何も言いません。では、よい旅を」

俺はリンとセランの念話で、話し掛けた。

この門番かなりやるなあ〜と俺は思うが、リンとセランはどう思う？

すると、リンが言ってきた：

わたしもそう思うわ〜さっきの喋り方とかは、素じゃない。偽っているようにしか見えないわ。

わ、わたしもです。あの方、あとから来ると言っただけだったので、また来たときには、わたしたちの強さを見て、勧誘に来るかもしれない。

だなあ〜。めんどい奴に捕まったなあ〜

す、すみません。

いや、セランのせいじゃない。俺が、殺気を少ししか抑えなかったからだ。

まあ、いいじゃない。それよりも、ギルドに行ってお金を稼いで、今夜の宿屋を捜しましょう。

「じゃあ、行くとするか…またな、嘘が上手な門番さん…」

門番は、目を見開いたが、すぐにニヤツと笑った。

俺らは、それからギルドに向かった…

「くっくくくっ…へえ、俺の嘘を見破るか…。これは、陛下に報告しとかないとな…」

そして、門番もその場から姿を消した…。

貴族の門番にはご注意を!?(後書き)

次回は 門番の正体と国王陛下に会う予定です。

カラフルすぎる建物!?(前書き)

王様の名前とギルドマスターの名前が出なかった…。

カラフルすぎる建物!?

俺たちは今、ギルドの前にきている…。
たぶん、ギルドだと思う…

「ここまでカラフルな建物見たことないわね」

リンが言った通り、建物がもの凄くカラフルなのだ。赤色や黒、茶、青、黄緑、緑、黄、藍、朱、紫などなど…

町では、この場所だけ、KYな感じがただよっている。

「入るのに勇気があるな…」

「そうね」

「い、行きましょう!」

チャランチャラン♪

「へい、いらっしやい」

「…。ギルドと間違えましたー!!」

俺らが、帰ろうとすると、

「待て待て、ジョーダンだよ。ここが、ギルドというのは本当だよ。
普通気付こうよ!!ここは!」

「いや、初めて入った場所で、いらっしやいななんて言ったら、普通は気づかないだろう!」

「すまんかった。つい癖でな。で、若いのにギルドに何のようだ?」
さっきまでの悪戯好きの子供のような顔が、厳しい顔に変わった。

「ギルド登録したいんだが、あんたがここのマスターで、間違いないか?」

「……なんでそう思うんだ?」

「修羅場をくぐり抜けてきたみたいなお顔してたからな、すぐに気づいた」

「…。そうか…よく見ているな。確かに俺は、ここギルドマスターだ。まあ、登録したいなら、向こうにいる受付嬢にいいな。お前なら、俺が認めてやる」

「そうか、ありがとうな。ついでに、こいつらもいいのか?」

「うーん。女の子は、心配だなあ。初めて見たなー珍しいなエルフなんて、てか、まじこんな可愛い娘いたら、いいなあ」

「あ、あの、えっと。これでも強いんですよ。わたしたち…」

「エルフが強いのはわかる。だが、まだ子供だろ。それに、そっちな女の子は、力があるとは思えない。」

「あら、それは私のことかしら…なら、このギルドで一番強い方と

勝負してもいいわよねえ、いいでしょう。鎌夜」

「リンがいいならいいが、あまり相手を虐めすぎるなよ」

「おいおい、本気かよ!!」

「当たり前よ。さあ、ここで一番強い人を出てきなさい!!」

「さっきはどうも。面白い話してるね。俺の本名は、Aランクのゴーザス・ルデイスだ。一応、第一番隊隊長をしている。二つ名は槍使いの紅蓮炎だ」

「どうだ？俺と勝負しないか？」

その男は、さっき門番をしていた男だった。

口調変わりまくり、

「てか、名前やっぱり偽だったか。てか二つ名ただ中二びよ…俺は、そのあと見てしまった…嘘が嫌いな、リンの極上の笑みを…」

「くすっ…、ええいいわよ。やりましょう。闘技場などは、ないの？」

「ギルドと言っても、そんな金あるかよ」

「では、外に出ましょう。鎌夜、結界よろしくね♪わたし少し暴れるから♪」

「はあ…言うと思ったよ。了解です」

「君たちの実力が知りたいから、少し本気でいくぞ」

「少しじゃなくて、本気で来ないと、負けるわよーあと、わたし嘘つく人嫌いな。だから、そういう人達がズタズタにされるのを見ると、楽しくて、楽しくて、つい：殺したくなっちゃうわ：」

リンの最後の一言で、ギルド内に殺気が充満した。

さっきまで、騒いだり、酒を呑んでいた者たちは、殺気に気づき全員が、こつちを振り向いた。

「くすっ、さあ：やり合いましょう。」

「殺すなよ。俺が治せる範囲にしてくれ」

「仕方ないわねー、じゃあ、あなたが治せる範囲まで、いたぶってあげる。外に出るわよ」

「わかった。ギルドのおっさん。外ですが、見に来るだろ？」
俺が声をかけると、すぐにおっさんは笑い出し、ああと答えた。

「あのお嬢ちゃん、すげえーな。それに、あんたたちも間近に居たのに、殺気を感じても、普通にしていって、しかも、治癒魔法使いか：。治癒魔法使いは、この世界で、三人しか見つかってないはず、これで、四人か：。」

「いや、リン：今から戦う奴も出来るぞ」

「なっ、まじかよ：」

「じゃあ、見に行くかね♪まあ、結界は張ったけど、あいつキレてるから、結界破壊しそうだなあ」

「面白そうなことをすると言うから来たんだが…今から、何があるんだ？」

「あ…、今から、国王陛下の側近と女の子が勝負するんですよ。」

「ふむ、それはかなり楽しそうだな。ギルドマスターお主も見に行くのだろう。」

「はい。この子たちも…」

ギルドマスターの声が変わったことに気づいた俺たちは、たぶんこの男が国王陛下だということにも気づいた。

「俺の名は、レンヤ・ソウジョウと言います。今から戦う女の子は、俺らの仲間のリンです。」

俺は、完璧な礼をとった。それに真似して、セランも挨拶をした。

「私は、エルフのセランといいます。私も彼らの仲間です。」

セランは、スカートの裾を少しつまんで、礼をした。

「…そうか。では、見に行こう。敬語などいらんからな…」
と言ってきた。

俺は

「そうか。助かった」
と言った。

ギルドマスターとセランは、何か言いたげだが、言わなかった。

「くっくくっ、それでいいぞ。では、行こう」

「そうですね」

そして、俺たちは、リンたちの戦いを見に行くため、外に出た。

「鎌夜、おそい。早くしようよ♪」

「ああ、結界なら、張ったぞ。」

「鎌夜は審判なのー」

「ああ、そういうことか、わかった」

俺は、二人が居る場所の真ん中にでて、コインを出した。

「このコインが落ちたら開始でいいか？」

「了解」

「わかった」

俺は二人の返事が合った後、コインをチリンと鳴らし、上に上げた。

コインがまた上がったときと同じようにチリンと鳴って、落ちた。

カラフルすぎる建物!?(後書き)

次回は、勿論戦いです。

死神の女神&鎌夜 VS 第一番隊隊長&国王様！？（前書き）

今回は、かなり慌ててつくっています。

間違いがあっても多めに見てください。

あと、今回のメインになるはずだった、リンと隊長の戦いは、かなり早いテンポで終わってしまいました…。

ほんと、すみませんでしたー。

気づいたら お気に入り登録が10件を越えてました。

夢かと思いました。まだ、寝ぼけているのかと、思うくらいです。

（T―T）

涙？まじで出てしまいましたー（ハズかしー）

こんな作者ですが、どうぞこれからもよろしくです。

死神の女神&鎌夜 VS 第一番隊隊長&国王様!?

今、俺とセラシ、王様とギルドマスターで、二人の戦いを見ている。二人とも戦っているが、やはり勝っているのが、リンであった。

リンは、男より力は、無いが、使っている鎌に魔法がついていて、それも回避しながら、戦うのはさすがのゴーザスも厳しいようでおされている。

リンは…。そろそろ飽きてきているのか、つまらなそうに、攻撃を避けたり、魔法を出したりしている。

…。もうそろそろ終わるかな…。

俺が立ち上がると、王様やギルドマスターが、どうした?と聞いてきた。

「いえ、もう終わるので」

「まだ、戦っているが?」

「リンが、飽きてきたから、すぐに決着を着けるそうです。」

さっき、念話でリンから、飽きた…。

と聞き、だったら早く決着を着けろ。終わったら、登録して、飯だ。

と言うと、嬉しそうに、分かったあゝ♪と返事がかえってきたのだ。

そして戦いを見ると、ゴーザスの剣を払いのけ、剣をぶっ飛ばし、勢い良くこちらに向かってくるリンの姿が見えた。

王様もギルドマスターも驚きを隠せない様子だ。

「リン、おかえり。早く登録して、ご飯にしような♪」

「うん♪おなか減った〜」

「レンヤ、わたしも、おなかすきました…。」

「そうだな」

と、話していると

「わたしがご飯を奢ってやろう」

王様^{たぶん}が、言ってきた。

「いえ、結構です。王様に奢って頂くなんて、恐れ多いです。」

「気にせんでいいぞ」

否定しないということは、やっぱり王様か…。

「我が城に招待しよう」

王様の招待断ること出来ねえー。

ということで、俺たちは、城に向かった。

「想像道理、でかいなあ…」

言わなくとも分かると思うが、敢えて言おう。城が…デカすぎなんだ。

王様が、門の前に来ると、ゆっくりと門が開きだした。いつまで、待てと…。

約60分（＝一時間）後に、門が開いた…。

「王様、いつも一時間も待って中に入るんですか？」

俺たち、腹減って死にそう…。

「いや、いつもは、人が入れるくらいだけ開けて、中に入る。」

「なぜ、今日は、門を全開にまでしたんですか？」
この糞王、俺たちを舐めてんのか？

「自慢だ」

「レンヤ、この爺殺して良い？」

やれるならやりたいが…

「ダメだ。これでも、国王様だぞ」

「ふうん。この爺が…」

国王と聞いても爺呼ばわりか…まあ、いいや。さて、今俺らは、普通に会話しているが、セランは、かなり怯えている。それは何故か？

答えは、とても簡単だ。

兵士たちが、剣や槍、弓などを俺らに向けているからだ。

王様は、笑って見ているだけ…

まあ、俺らも王様の悪口を堂々と本人の目の前で、言っていたのにも原因があるがな…

「我らが王を侮辱するか!!」

はあ、だりいな

「うるせえなあー」

「そうね。わたしおながが減ってるし、こんなことで、時間をつかいたくないわ。勢いで殺して良い? 鎌夜」

「やめとけ。俺らは、王様に招待されたから来たが…、腹減ったし、どこかの宿に行くか」

「鎌夜がそう言うなら、仕方ないわね」♪ 鎌夜、どこの宿に行く?」

「それは、また街に行って探そう。この頃、口調変わったナリン」

「これが素なのよ。へ、変かな…」

「いや、可愛いぞ」

「そ、そう：／／／」

ほんと、顔が赤くなって可愛いなあ〜♪

「もう、鎌夜のバカ。セランもう行こう！」

「あっ、はい」

さっさと行ってしまった二人を見て、苦笑して、王様達に向き直った。

「王様：俺たちは、強い：この世界の誰にも確実に負けない。だが、俺らを巻き込むな：。もし、俺らを巻き込むようなことや俺たちを不快にさせるようなことをしたら：、俺らは、お前じゃなく、この国すべてを壊してやる：。俺らを甘く見るんじゃないぞ？ 国・王・様：」

「ふん、そんなの会ったときから気づいとるわい」

「国王様になんて口のきき方だ！！こいつだけでも、排除しろ！！」
後の二人も探せ。一人は、醜いエルフだ！！」

その言葉を言った瞬間、空気が変わった。

殺気：。それは、リンと言う少女が出していたものとは比べものにならないほどの：。

その場にいる騎士でも、泡を吹いている。

さすがは、国王。まあ、さっきを少し抑えているが：。まだこの殺気では、泡は吹かないか〜まあ、話すと時間かかるし、せっかくリ

ンが、気をきかせて、セランを連れて行ったので、この姿を見せなくてすんだ…

その前に、俺はしなくちゃいけないことがあったな…

グサツ、グチュグチャ…ペチャ…

「王様。今度会うときは、頭のいい騎士を雇うべきでは？」

俺は、セランを侮辱した者の命を消した…。うえ、血がついた…キタねー

俺は、殺したことを気にした感じもなく、クスツと笑って王様の前から姿を消した

死神の女神&鎌夜 VS 第一番隊隊長&国王様！？（後書き）

作者的には、リンが、女の子らしくなってきてくれてうれしいです。

王様は勘が鋭いようです!?(前書き)

すみません。

いろいろ忙しくバタバタしていたら、遅くなってました。

今後も、こんなことがあるとは思いますが、どうぞよろしくお願い
します。

王様は勘が鋭いようです!?

…なぜ俺らが、いや俺とリンが、王様にあんなことを言ったか、というと…早い話が王様が、俺らの前に来たときに、魔法で、王様の心の声を聞こえるようにしたので、心の声が、まる聞こえだった。

ギルドマスターが俺たちを紹介したとき、俺とリンは直ぐに気づいた。

この王様は勘が鋭いと…

ふん、冒険者か…それもエルフもち、めずらしいな…

ゴーザスが戦っている女は、かなりの手練れだろう

そして、この男は…何かは分らんが、ヤバい気がする…
それにしても、ゴーザスは何をしているんだ! たかが女一人に、手こずりおって…。

せっかく、第一番隊隊長を任せてやっているというのに…

ん？何故この男はまだ戦っているというのに、立ち上がっているのだ？

「どうした？」

と聞くと、

「いえ、もう終わるので」

なんだこいつは、我が軍の第一番隊隊長が負けると言いたいのか…。馬鹿にしているのか…この男が…我を馬鹿にするとどうなるか思い知らせてやる。

「まだ、戦っているが？」

「リンが、飽きてきたから、すぐに決着を着けるそうです。」

…調子に乗りやがって…ん？飽きてきたから…？この男いつ、女と喋った？いや、我が来てから、女とは、そんな話はしていなかった…。

なら、こいつらは、どうやって…

…まさか…な、

念話なんて、できる奴など今までで、一人しか居なかったが…まさか、出来るというのか…。

だが、もし、出来るというなら、戦場に出てもいち早く、その場の状況がわかり、対応する事ができるではないか…。

それにこの男、弱くはない、いや、強すぎるという感じだ…あの女

たちもこの男を信頼している…。

なら、女どもを捕まえて、この男を言いなりにすればよいではないか…。

いや、止めておこう…

この男には、何も効かないだろう…。

…。ふむ、食事がまだだったのか…。

「わたしがご飯を奢ってやろう」

というと、

男は

「いえ、結構です。王様に奢って頂くなんて、恐れ多いです。」

気づいていたか…

「気にせんでいいぞ」

「我が城に招待しよう」

ちょっとした悪戯は、さっきの仕返しだ…我は満足だがな…

この者達、おもしろいな…。

私の心を読んでいるのだろう…。レンヤとリンと言ったか…レンヤと二人だけで話がしたい…。

……

分かった。

と声がした。

やはり聞いておったか…

リンには、セランを連れて行ってもらった…

ふむ、すまん。

いや別に、静かだと隊員たちから怪しまれるから、話すぞ。

そうだな

「王様…俺たちは、強い…この世界の誰にも確実に負けない。だが、俺らを巻き込むな…。もし、俺らを巻き込むようなことや俺たちを不快にさせるようなことをしたら…、俺らは、お前じゃなく、この国すべてを壊してやる…。俺らを甘く見るんじゃないぞ？ 国・王・様…」

「ふん、そんなの会ったときから気づいとるわい」

すると横にいた兵士が

「国王様になんて口のきき方だ！！こいつだけでも排除しろ！！後の二人も探せ。一人は醜いエルフだ！！」

国王様、俺らは仲間を悪く言う奴は嫌いだね…。

すまん。この者は私が処分しよう。

いや、仲間のために俺がこの場で殺していいか…？

わかった…。今のは、こいつが悪かった。エルフの少女に謝つてくれ…。

ああ、わかった。あんた、いい王になるぞ…。

ふん、もうなつとるわ。

じゃあ、俺らはいいつを処分して、一旦リンたちと合流して、また来るが、その時に、二人で話そう…。

「王様。今度会うときは、頭のいい騎士を雇うべきでは？」
と言い、レンヤは消えた。

レンヤが消えて、ゴーザスが近寄って来た。

「王様。大丈夫ですか…。あの戦った女、俺が本気でやってても、じゃれあっているみたいに遊ばれました…。本当に、頭のいい騎士を雇うべきですね。今度からは、それも入れて、兵を集めましょう」

「そうだな。しかし、第一番隊隊長が本気を出しているのに、負けるとは…まだまだ鍛え直さないといけないなあ…？ ゴーザス？」

「ひい、は、はい」

「なら、城の周りを百周、腕立て伏せ五百回、他にもいろいろしろ…。百回以上はしろ…！」

「は、はい…」

そしてその日から、ゴーザスたち兵は地獄の特訓が始まった…。

王様は勘が鋭いようです!?(後書き)

まさかのレンヤと王様が裏(心の声)で話していたなんて…。

しかも、王様悪人かと思いきや意外と優しそう…

今回は、王様視点でしてみました。

可愛い子には毒がある!?(前書き)

サブタイトルは大雑把に決めているのであまり気にしないでください。

可愛い子には毒がある!?

「セラン。こちら辺で、宿を探しておきましょう。」

「あつ、はい。そうですね。」

「なあ、その可愛いお嬢ちゃんたち、俺らと遊びに行かないか」

「セラン。あの宿はどうかしら？値段も良さそうだし、レンヤが気に入るそうな宿だけど…」

「良いと思います！レンヤも気に入ってくれれば良いですけど…」

「お前ら、俺らを無視してんじゃねえよ!!」

「レンヤまだかなあ」

「そうですねえ。おなかペコペコです…」

「お前ら…ぶん殴ってやる」

いきなり後ろから人影が出てきた。

「遅くなってすまん」

「レンヤ本当、遅い…。おなか減りまくり」

「わたしもです」

「ああ、すまん。で、いい場所見つけたか？てか、誰こいつ？」

「知らないわ。勝手に喋っていたから、独り言と思って無視してた。宿の場所はここよ」

「リンが無視してたので、私もしてました。この宿値段も良さそうだし、雰囲気も良さそうなので、ここにしました。（レンヤが気に入りそうだから、ここにただけですけどね）」

「そうか。こういう場所は結構好きだな。ありがとうリン、セラ。あとこれからもこんなことが遭ったら、殴っていいからなくこんな感じで…」

「は、離せ。てめえ調子こいてんじゃねえぞ」

ボキッゴキッた、たすけ、…て、く……れ
ギアアアア

「はあゝい。セランはわたしが守るわ」

「では、私は後ろから援護します」

「ま、俺がいるときは俺がやってやるがな…」

「じゃあ、早く宿に行ってご飯食べよー」

「はい」

「そうだな」

チリリン♪

「いらっしやいませー」

「宿空いてますか？」

「はい。三名様ですね。一人一部屋と二人で一部屋でいいですか？」

「ああ、それでかまわない」

「何日の滞在ですか？」

「まだ、決まっていないういか？」

「はい。では、一人一部屋は202の部屋です。二人部屋は203の部屋になります。部屋は近い方がいいと思うので、隣にさせてもらいました。あとは、あとで食事を持って行きます。」

「ああ、わかった。ありがとう」

笑顔で、返事をする、店員さん顔真っ赤だな…

「顔赤いが大丈夫か？」

「はっ、はい。大丈夫です／＼では、案内します」

「いえ、大丈夫ですよ。場所は行けますから」

「そうですか？一応言っておきますが、二階にあります。私はだいたいここにいるので、なにかあれば声をかけてください」

「ああ、ありがとう」

「じゃあ、いきましょセラン、レンヤ」

「はい。」

「ああ、んっ？ああ、なるほどなく店員さん今からすぐ俺たちを訪ねてくる人がいるが、来たら俺たちのとこまで案内してくれないか？」

「わかりました。あと、私の名前はスーランです。ランと読んでくださってかまいません」

「ああ、わかった。では、よろしくなラン」

「はい」

「リン、セランはしゃぐなよ。」

「わかってるわよ。…来るんでしょう？」

「誰がですか？」

「あとでリンに聴いといてくれ。」

「わかりました」

「では、もう部屋に入ります」

「ああ、おつかれ」

「レンヤもね」

「ああ、リンは来たときに、心を聞いといてくれ」

「了解」

そして俺たちは、自分たちの部屋に入っていった。

ふうー、つかれたな…。

王様が来るまで結界張つという寝ところかな。

……zzz。

大物は意外と暇人なのか!?(前書き)

今回は 結構長いです。

間があきすぎてすみません(T|T)

大物は意外と暇人なのか!?

トントン トントン

「食事お持ちしました。あとお客様がお見えです。」

ふあゝ。まだねみいゝ。結構寝たと思うが…

「ああ、ありがとう。今開ける」

カチャリ

「これ食事です。お客様をこちらに呼んでもよろしいでしょうか？
…」

食べながらもいいのかなあゝ
まあ、いつか…

「ああ、いいよ」

「では、すぐに呼んできます。」

この少女凄いなあゝ♪普通あんな客（大物）が来たら、大慌てなのに…。

「来てやったぞレンヤ」

「呼んでないぞ…てか、また来ると言ったはずだが…一国の王が外に出てもいいんですか？暇人なんですか王様は？」

ハァ。今、俺が言ったとおり王様が目の前にいる。まあ、来ることは分かりまくってたけどな…みんなもそうだろう？

あゝ、今リンとセランから念話で話があった。なんか、多数いろいろ誤解してるみたい…

「「みんなって誰なの（ですか）！！」」

「あゝ、なんていうかー」

「レンヤあなたには、私たちがいるでしょう！！」

「ヒドいです。リンも私も信じていたのに…」

「いや、あの、その、みんなというのは、これを見ているだろう読者様のことだ。けして、変な間違いをしないでくれ」

「そ、そうなの／＼（読者って誰よ！）」

「そ、それなら先に言って下さい／＼勘違いしたじゃないですか／＼（誰かが私たちを見ている！？／＼／＼）」

「へえゝ、どんな勘違いをしたのかな？王様との話が終わったら、たっぷり教えてねゝふ・た・り・とも♪」

「レ…、レンヤ。王様が待ってるから…は、早く話を進めたら／＼（セラン何言ってるのよ…！！）」

「そ…、そうですよ。お、王様を待たせたらいいけません…／＼／＼／＼すみません…！！）」

「そだね～王様と話したあと聞きにいくからね♪じゃ～」

ふう～、おもしろいなあ～♪あつ、ちゃんと念話だから、声は出してないぞ

「もう話してもいいか？念話？をしているようだが…わたし自ら来ているというのに…全く…」

「だから、また俺から会いに行くといったでしょう王様。ハァ～、でなんで来たんですか？王様も忙しいんでしょうし、早く話をしてください。」

俺が今言ったことを略すと、

俺も忙しいから聞くだけ聞いてやるからさっさと早く話を終わらせて帰れ。

と言う意味になる。が、王様はなにか誤解したらしい…。（勘が鋭いはずなんだが…）

「確かに、わたしは忙しいが、今回は全部部下に任せてきただから、大丈夫だ。それに、私が来ることは分かっておっただろう？」

何が大丈夫なのかが聞きたい…。

というか、全部部下に任せてきたってことは、簡単に言うとか、部下に任せて隙について勝手に来たことにならないか…。

「ハァ～、で？なんかあったから王様自ら来たんだろ？一応聞くだけ聞いてやるからはやく言って下さい。」

「そ〜なんだが…。レンヤは、竜たちのことをどこまで知っておる？」

「いや、まったく知らん」

「…まあいい。今からこの世界の始まりのことについて話すぞ。」

この世界には、神がいなかった。例えばどんな荒れた世界にも、神は存在したが、何故かどの神もこの世界が存在すること事態を知らなかった…。いや、知ることが出来なかった。

それは、この世界があまりにも魔力が高すぎるのが、原因だった。魔力が高すぎて、神は近づけない。神には、魔力と反対の真力しんりょくという力があり、世界には、その魔力と真力が平等にないと、いずれ滅んでしまう。だが、今の神にそんな真力を持つものなど一人しかいなかった…。

「じゃあ、その神に頼めば良いじゃん。」

「うむ、そうなんだがな…その神が面倒くさがりやで、『だりい』とか言っただけでなかなかその世界に行ってくれなかった…。で、その神が、自分の代わりにと、創ったのが三体の龍と五体の竜なんだよ。」

神様が面倒くさがりとかいいのか…てか、竜八体で多くね!?

「ん?、三体の龍と五体の竜はどう違うんだ?」

「そうだな。まずそこを話そう。違いは、五体の竜は飛べないが三体の龍は飛べるからだ…」 「なんで、分けたんだ? 同じでもいいだろ?」

「神は、五体の竜をその世界に住まわせて、世界の様子を見、三体の龍に教える係なんだよ。で、三匹の龍は、飛んで神の所までその情報を教える係なんだよ。」

「めんどくさがりすぎるだろ!! それぐらい自分でしろよ!」

「まあ…そうなんだが…。次は、龍や竜たち一体一体のことについて話すぞ…」

大物は意外と暇人なのか!?(後書き)

レンヤは一応鈍感です。

今回のは、ノリで言ってるだけです。気づいてはいません。

中途半端な所で終わってすみません。

語り継がれる昔話!?(前書き)

遅くなってすみませんでしたー(十◇十)

宿題とテストがヤバくて…。

今回は五匹の竜の話だけです。

語り継がれる昔話!?

真つ赤な赤それは 血の赤 炎の朱 幾千の戦いで流れた赤 そんな赤を身に纏う… 口から朱い炎を吹き… 火を吹く火山に住んでいる… それは 紅を司る竜 グレジス

流れる青それは 広大な海の碧 空の青 潤いをもたらす水… 生きるものすべてに癒やしを届ける… 深海に生き すべての水を操る… それは 蒼を司る竜 スレーオ

迷宮の緑それは 森林の深緑 嵐の風 自然が生みだす地… 一回迷えば出られない… 深林の向こうに住んでいる それは翠を司る竜 フィーリア

たくさんのものを支える色それは 大地の黄 すべての始まりの地を知るもの… 砂漠の底に身を隠している… それは黄を司る竜 ハイレク

風が舞い踊り草木を揺らし 涼しさを与えるそれは さまよい続けるそれは無色透明… 眼には見えず 怒りの時は台風さえ引き起こす… それは銀を司る竜 サムフィー

五匹の竜は 地に降り立ち世界のすべてを見つめてる。 世界に住むすべての者達よ 竜はすべてを見ていることを肝に命じよ。

「これが 種族関係なく語り継がれている竜の話だ。 まあ…なんと言おうか…話が堅すぎる気がするが…まあ…気にするな…」

「ああー…、俺も思ったわー。で、後の三匹の龍は？」

「うむ。まあ、ゆっくり今から話すぞ…」

語り継がれる昔話!?(後書き)

総合評価が 100 이었습니다？

本当ありがとうございます。

三匹の龍（前書き）

ほんとすみませんでした。（十◇十）

テスト明けで、ゆっくり書いていたら、まさかの文化祭の準備！？
という感じで遅くなりました。

また、遅くなると思いますが、どうかあたたかく見守ってください
（≡|≡）

三匹の龍

生きるものすべてに感情があり、考えがあり、想いがある。
それはみな同じものではない。

神の使者 龍よ。神の命により 我らを見守るものよ。 想死生の
元に 我らはあなた方に 想死生を預ける事を誓う…。

「想死生てなんだ？」

「言葉の通り。想い・死・生のことだ。そして三匹の龍を表す。」

我らの心を全てしる龍 ユリエニアよ
想いを紫に例え 我らに赤のような怒りや 青のような悲しみを教
えよ

我らの死を全てしる龍 ディエオよ
死を漆黒に例え 生涯の終わりの時まで我らを見守り続けたまえ

我らの生を全てしる龍 クイシスよ
生を純白に例え何色にも染まらぬ 真っ白な生を授けたまえ

「これが三匹の龍と五匹の竜の話なんだが…今、竜と龍の様子がおかしいのだよ」

「どうおかしいんだ？水がなくなって来ているとかか？」

「いや、そんなのじゃない。その逆に元気が良すぎてな…泉の水が溢れたり…いきなり火山が噴火したり…他にも色々あってな…理由を聞いたら、ギルドで女二人と奇妙な男を連れてこいと言ってきてな…勘だがおまえ達のことかとおもってな…」

王様が勘って…国は大丈夫なのかよ…

「ああ、ん、たぶん俺たちかも…」

死神居るしね…。

一応女神だけ…。

「まあ、その神の使いが会いたいと言ってるんだが、会いにいかんか？」

ん、どしよ？

リン 会いに行く？

行っという方が良いんじゃない？この世界に詳しいから色々訊けるでしょ

それもそだなあ

じゃセランにも言っというて

分かったわあ

「居場所は大丈夫なんですか？」

「ああ…ただ風のサムヒイは放浪としているから分らんが…龍や竜たちが捜してるのがお前なら、きっと自分から会いに来るだろう」

めんどくさあゝい

てか 竜来れるのかよ…町が破壊されるの間違いじゃ…

「どうやって会いに来るんだ？」

「確かに、竜本来の大きさなら町が壊されるかもしれんが…人の姿になれるらしいが…まあ儂もどんな姿かは見たことはないが…」

「へえ、でも見たことないなら竜か分からんじゃん」

「儂もよくは分らんが、たぶん自分から名乗ると思うが…」

「そか…、ならまあいいや」

ドタドタドタ バタバタバタ

「なんか五月蠅くね？外」

「…。いや、気のせいじゃないのか…たぶん…」

「王様。此処に来るとき誰かに話した？」

「……………」

「たぶん、兵の方々だねえー、あの足音王様を捜してるみたいだに聞

こえるんだけど」

「……レンヤ……ついでの頼みがあるんだが……、儂を逃がしてく
「兵の皆さーん、王様此処に居ますよー」レンヤ見捨てるのか!」
バタッン!!!!

「陛下コンナトコロで何をしてイラッシャルンデスカ？」

「ひっ…いや…あの…大事な話をレンヤとしてたんだよ…なあ レ
ンヤ」

うわゝ王様なんかすごく訴えようとしている…めんどいな…。

「陛下大事な話は書類が全部終わってから…と言いましたよね…」

ニコッ

「あ…ああ…そうなんだが…「言いましたよね」はい…言っ
てまし
た…」

こえー、王様弱

この子怒らせると怖いな…

「失礼ですが。あなたがレンヤさんで間違いないですか？」

「ああ、レンヤ・ソウジョウだ。あんたは？」

「わたしは、シェリル・ノーズと言います。王様の護衛兼第一番隊
副隊長を勤めています。今回の兵と隊長の態度については、本当に
申し訳ありませんでした…。私がない間に…。彼らに止めさせる

事が出来なかった：だからあなた方には、とても感謝しています。陛下がお邪魔して申し訳ありませんでした：コレは連れて帰ります。また城にお越し下さい。今度は最高のお持て成しをさせていただきます」

王様をコレ呼ばわりか：それでも頭もいいみたいだし、体術の経験もあるみたいだな：後胸がで：：いや、リン：まだ何も言っていないぞ。鎌の音が聞こえるが：構えてないよな？冗談だよ？この子仲間に欲しいなあゝえっ！？私達が居るでしょ！？いや、指揮が良さそうだったから：

「やらんぞ」

ちっ 来んなときだけ勘が鋭いな：まあいいや今度自分で聞こおゝ

「てか、コレ（王様）のせいでご飯まだなんだけどもう食って良い？ああ、コレはすぐ連れて帰っていいから」

レンヤは、言いながら王様をみる

「そうだったんですか！！ホントにすみません。ほら、王様早く帰って書類を終わらせますよ！」

「おまえ達さつきから儂のことを馬鹿にしているだろ！！儂は王だぞ。」

うわゝ、醜い：

「王様。そんなのはわかっています。この国に居て知らぬ人などいないですよ。何、当たり前なこと言っているんですか？」

「だったら何故さつき儂をコレ呼ばわりしたんだ！」

「書類の量が多すぎるからと、誰にも告げず城から出た方が何を言ってるんですか？コレ呼ばわりされたくないなら、ちゃんとして下さい」

「うっ…」

王様が、可哀想に見えてきた…

「では、レンヤさんこれで失礼します。今度来たときは、武術や魔術など教えて下さいね。ほら、王様生きますよ！！」

「わ、わかっている。レンヤ、またな…」

ボタン

ふう、やっと帰ったな…あれ、あんまり腹減ってない？どういうことだ？リンわかる？

ああそれは、レンヤは1ヶ月ぐらい飲まなくても食べなくても良いようにしたから♪

かなり、便利だな…まあ、食わねえーならいいや。リン俺の分セラシと食べていいぞ

やった♪

なら、俺は寝るわーおやすー

おやすみレンヤ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0325v/>

† Take it easy †

2011年9月16日12時50分発行